指導上の注意点

●二四六ページ

問 **「こういうわけなんで」（上 4 行目）とあるが、エノモトさんが伝えたかったのはどのようなことか。**

答 エノモトさんが、実際に人魚を手に入れたのだということ。

補 人魚を手に入れたということが荒唐無稽な話だと自覚しているが、とにもかくにも人魚が自宅にいるという証拠を示した。また、曖昧な言葉で表現したのは、人魚が実在するという事実や、人魚から離れがたくなる気持ちについて、はっきりと言葉で説明できなかったから。

問 **◉「人魚、と言いかけたが…言いなおした」（上 10 行目）ことから、「人魚」をどのような存在として捉えていることが分かるか。**

答 高度な意識を有する、人間と同等の存在。

補 人魚が人語を解するかどうか分からなかったが、自分が人間以外のものに「人間」と呼ばれたら気分悪かろうと思ったからである。とある。「人魚」という種の呼び名でなく、「この」をつけ、「このひと」と呼ぶことで、人魚を個体として尊重していることが分かる。

●二四七ページ

問 **「交番に届けるものなの？」（上 12 行目）という「わたし」の問いかけに対しエノモトさんが「真面目に聞いてよ」（上 14 行目）と答えたのはなぜか。**

答 エノモトさんは人魚をただの物ではなく人のように感じており、行く当てのない人魚を交番にとどけて相談するのが適切だと思っていたから。

補 エノモトさんにとっては人魚を保護するために連れ帰ったのであるが、「わたし」にとっては「拾得物の処理」であるという認識の違いがある。「わたし」の質問が、話の腰を折るようなものに思えたのである。

●二四八ページ

問 **◉「エノモトさん」は、なぜ、「わたし」に相談したのか。**

答 このままではいけない、このまま人魚と一緒にいるとだめになってしまうと思い、とにかくこの状況を誰かに話したかったから。

問 **◉「このありさま」（下 1 行目）とは、具体的にどのような状態を指すか。**

答 人魚のそばに行きたくていてもたってもいられず、いちばんいいのは人魚を海に帰すことだが、知らないふりをする状態。

問 **「エノモトさんはどんなかと思うと、少しばかりぞっとした。」（下 1 行目）とあるが、この後エノモトさんは「どんな」状態になるか。**

答 何を考えているのか分からないような表情でただ黙ってわたしを睨み続ける放心状態。

補 いずれ「わたし」も同様の状態を反復することになる展開の伏線であることに気付かせたい。後の「うわあ」という声とともに走り出す姿も同じである。

問 **◉人魚を「最後は預かることになってしまった」（下 2 行目）のは、なぜか。**

答 ひとつはエノモトさんがこのままではダメになってしまう、と思ったから。それに加え、この時点でわたしは既に人魚のそばを離れたくなくなっており、人魚を離せなくなっていたから。

語句の研究

●二四五ページ

上13 造作　「ぞうさく」。建築や建築内部の総称。比喩的に、顔のつくり、目鼻立ちのこと。

下7 髭をしごいた。　長い「髭」はエノモトさんの外見に関する数少ない記述の一つ。

下19 潮の匂いが強かった。　人魚は、初期の川上作品の特徴である、異種といもいうべき存在である。ややもするとアニメやおとぎ話で描かれるようなファンタジー的要素の強い存在だが、ここでは嗅覚的特徴を示すことで現実味を持たせ、人魚の外見をリアルに描いたことと同様に、幻想と現実が混ざり合うようにバランスを保っている。

●二四六ページ

上10 人魚、と言いかけたがやめにして、　「人魚」という種の呼び名でなく、「この」をつけ、「このひと」と呼ぶことで、人魚を個体として尊重していることが分かる。また、初めて人魚を見た時に既に、人魚に魅了され始めていたのである。

上17 盥　水や湯を入れて顔や手足を洗う器の総称。

上17 鯵　アジ科の魚の総称。全長約三十センチメートル。食用。

下20 人魚がいかに人を惹きつけて離さないか　「惹きつける」は、人の心を誘い寄せる、魅了するの意。ここで題名の「離さない」という言葉が出る。ギリシア神話の「セイレーン」や、「ローレライ伝説」を始め、各地に残る人魚伝説などを例として挙げることができるだろう。

●二四七ページ

上12 顔をしかめ　不快などから表情をゆがめること。

上17 真面目に拾得物の処理方法について考えてるんだわよ。　「わたし」はまだ人魚に完全に魅了されておらず、「拾得物」と表現しているが、エノモトさんにとって人魚は「物」ではなく、話がかみ合わない。また、この言葉遣いから「わたし」が女性であると判断できる。他に「お茶でもいれるわよ。」（二四八・下8）、「むつかしいわよ。」（二五二・下10）が同様の言葉遣いとして出てくる。

下1 最初は、　後に続くのはエノモトさんの言葉だが、「　」がついていない。一時的にエノモトさん視点の語りに切り替わり、地の文に混ざり合っている。「二か月前、南方に旅をした。」（二四四・下20）から始まる段落も同様。

下3 おっくう　面倒くさくて気が進まないこと。

下6 一刻も早く　わずかの時間も猶予がないこと。

下10 画布　油絵を描くのに用いる布。キャンバス。カンバス。

●二四八ページ

上7 いてもたってもいられない　不安や苛立ち、喜びなどで、じっとしていられない様子。

下9 エノモトさんは浴槽から動こうとしない。　エノモトさんの様子が急に変わった場面。「わたし」が自室に戻って浴槽に水を入れている間に、エノモトさん一人だけで人魚と一緒にいたことで、人魚に強く魅了されてしまったと考えられる。

●二四九ページ

上4 エノモトさんの気配が部屋じゅうに濃く漂っている。　放心状態のエノモトさんが夜になっても人魚のいる浴室に長時間残っており、何が起きているのかも「わたし」

には分からず、異様な緊張がはりつめている様子。浴室で人魚を見ているエノモトさんの存在を意識せずにはいられない様子。

上13 コップに浮かせた桜の花びらのように、ふわりと水に浮きながら、人魚は眠っていた。

「花びらは、水に浮いてふよふよと漂った。」（二四四・上12）にある桜の花びらと、人魚のイメージが重なる描写。また、エノモトさんの錯乱状態と落ち着いた人魚の様子が対照的に描かれ、読者に不気味な印象を与える。

注意する語句

（＊で用例を示した）

そぞろ…気持ちが落ち着かないこと。そわそわするさま。

＊試験の結果が発表されるまで、心もそぞろだった。

涼しげ…ほどよく冷たくて気持ちのよいさま。さわやかであるさま。

＊涼しげな風が吹いてきた。